

市大で古代史を学ぶ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学日本史学会 公開日: 2019-07-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 磐下, 徹 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20190709-009

Title	市大で古代史を学ぶ
Author	磐下, 徹
Citation	市大日本史. 21 巻, p.10-14.
Issue Date	2018-05
ISSN	1348-4508
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	特集： 共同の営為としての歴史学： 市大日本史ここ一〇年の 歩みから

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

市大で古代史を学ぶ

磐 下 徹

はじめに

大阪市立大学日本史学会が創設されて二〇年が経過し、直近の一〇年間の教室の様子を振り返るとというのが、この企画の趣旨である。しかし、筆者が市大の着任したのは二〇一三年の四月であるため、この一〇年を概括することはできない。そこで、着任以来の五年間を、市大で古代史を学ぶという視点から振り返ることで、与えられた責を塞ぎたいと思う。したがって、この文章のほとんどが、個人的な問題に終始してしまうことをあらかじめご了承ください。

市大に来てからの五年間での筆者のささやかな学術的な営みは、大きく分けて二つに分けられると思う。一つは着任以前から（大学院生の頃から）取り組んできたテーマにかかわるものであり、もう一つは共同研究や授業など市大での活動の中で出会った新たなテーマにかかわるものである。

1 市大以前からのテーマ

市大に着任する以前から取り組んできたテーマとしては、郡司・郡司制度を中心とした古代国家の地方支配に関する研究と、主に平安時代の史料の校訂と註釈の二つが中心となる。これらについては、二〇一七年度までに、以下の三点の図書の刊行という形で一つの区切りを迎えることになった。

① 佐藤信監修・朝野群載研究会編『朝野群載 卷二十二校訂と註釈』（吉川弘文館、二〇一五年、共著）

② 『日本古代の郡司と天皇』（吉川弘文館、二〇一六年）

③ 大津透・池田尚隆編『藤原道長事典 御堂関白記からみる貴族社会』（思文閣出版、二〇一七年、共著）

①は大学院生の頃から参加してきた、『朝野群載』の研究会（朝野群載研究会）の成果である。『朝野群載』は平安時代後期に、下級実務官人出身の三善為康が編纂した文例集で、当該期の政治・行政・外交・

文芸など様々な場面でどのような書式の文書が使用されていたのかを知ることがきる史料である。また、為康が『群載』に収録するための文書を、どのような経緯で手に入れたかを追うことで、当時の下級官人の交流の一端を復元することもできる。①で対象とした巻二十二は地方行政に関する文書を収集した巻であるが、そこには院政期のみならず、摂関期以前にさかのぼりうるような内容の文書も収録されており、たいへん興味深い。巻二十二に収録されている「国務条事」は、とりわけよく知られた史料である。

このように、多くの可能性を秘めた史料であるにもかかわらず、『群載』の活字化されたテキストは、改訂史籍集覧と新訂増補国史大系しかなく、その校訂は十分なものとはいえない。そこで、近年の『群載』写本研究の成果にもとづきながら新たな底本と対校本を設定し、巻二十二の現段階での最も適切な校訂本文を示しつつ、あわせて各収録文書に註釈を施したのが①である。筆者は研究会立ち上げ当時からメンバーで、①の刊行に際しては、全体の編集にかかわらせていただくことができた。

③も院生の頃からかわらせていただいていた、藤原道長の日記である『御堂関白記』の研究会の成果である。この研究会は、故山中裕先生の主宰されていたもので、日本古代史のみならず、中世史や国文学を専門とする方々も参加されていた。『御堂関白記』を輪読しながらその註釈を作成していくというもので、その成果は順次『御堂関白記全註釈』（全一六冊、国書刊行会→高科書店→思文閣出版、一九八五～二〇

一〇年）として刊行されていった。③は『全註釈』の内容を前提として、藤原道長の生きた時代を、道長の視点からとらえることを目的に、約一〇〇〇項目を選んで解説を加えた事典である。三〇余年に及ぶ研究会のうち、筆者が参加できたのは最後の三分の一程度の期間のみであったが、③の項目選定や「政務・儀礼」を中心とした項目執筆にかかわらせていただくことができた。

これら共同研究の成果である①・③は、写本系統の検討と、複数の写本の比較による厳密なテキスト校訂や、一つ一つの語句を丁寧に取上げ、類例や関連史料を示しながら意味を確定させていく註釈という作業を前提とするもので、文献にもとづく歴史研究の根幹をなす営みといえる。地味ではあるが、こうした基礎的な研究は、今後重要な課題として掲げていきたいと考えている。

次に②については、卒業論文以来取り組んできた、郡司を中心にした古代国家の地方支配に関する研究を、現時点でまとめた著書である。郡司と天皇の関係、郡司層の動向という二つの視点から、古代国家の地方支配政策の展開を追い、それを通して古代国家の特質を論じることを試みたものである。幸いにも刊行後、いくつかの学術誌で書評していただく機会を得た。書評でご批判いただいた点や、著書をまとめる作業の中で明らかになった問題点を新たな課題として、当該分野のさらなる追究を続けていきたいと考えている。

以上が、市大着任以前から取り組んできたテーマの、ここ五年間での進捗状況である。無論これらは、筆者の個人的な研究にかかわるも

のであるが、講義や市民講座で取り上げたこともあり、それらの機会を通じて得られた気づきや課題も少なくない。その意味では、市大で古代史を学んだからこそ得られた成果が少なからず含まれていることを付記しておきたい。

2 市大以後のテーマ

次に、市大着任後に新たに出会ったテーマを振り返ってみたい。

まず挙げられるのが、難波宮研究会での活動である。この研究会は、二〇一四年度に、市大の教員（岸本・磐下）と大阪歴史博物館や大阪市文化財研究所の方々とで始めた研究会である。前年度に、市大と大阪市博物館協会の包括連携協定事業として開催したシンポジウム「難波宮と大化改新」をきっかけとしたもので、難波宮をはじめとした都城制の問題や、大化改新論についての議論を積み重ねてきた。日本のみならず、東アジアも視野に入れながら、考古学、建築史学、文献史学による多面的な議論を展開している。筆者は郡司制度の出発点としての孝徳朝の重要性を重視してきたこともあり、大化改新以降の七世紀史への関心自体は必ずしも新たなものではなかったが、具体的な難波宮の遺構や遺物に即して七世紀史を考える重要な機会となつていく。

この研究会の成果は、二〇一四年度の「難波宮と大化改新Ⅱ」、一五年度の「難波宮と大化改新Ⅲ」の二回のシンポジウムの開催に結実している。特に一五年度のシンポジウムは、中国や韓国から都城制の

研究者をお招きすることもでき、充実したシンポジウムとなった。現在は研究会のメンバーによる論文集の刊行に向けて準備を進めている。

また、大学での講義、特に大学院演習（ゼミ）で取り上げた題材も、新たな研究テーマといえる。着任以来、大学院のゼミでは平安後期の公卿である源俊房の日記『水左記』を講読している。『水左記』は必ずしも多くの分量が残されているわけではない。しかし部分的ながら俊房の自筆本が残されていることや、現存史料のきわめて少ない院政開始前夜の藤原頼通・教通執政期の記録として貴重である。

大学院演習では、増補史料大成本をテキストに、冒頭の康平五年（一〇六二）から始め、別の資料をとりあげた二一〇四年度を除く一七年度までの四年で、康平八年（一治暦元年）の途中まで読み進めている。特に康平七年については、俊房自筆本（宮内庁書陵部所蔵伏見宮家旧蔵本）が残っており、その複製も刊行されていることから、原本の複製を用いながらじっくり読み進めていくことができた。

記事を読解していく中では、大小さまざまな「発見」があり、自筆本の様態からは、俊房の日記の付け方の特徴もおぼろげながら見えて来た部分がある。『水左記』に関しては、『平安人名辞典 康平三年』（和泉書院、二〇〇七年）や、『尊経閣善本影印集成65 水左記』（八木書店、二〇一七年）などが刊行され、その研究環境は整えられてきている。

こうした状況のもとで、『朝野群載』や『御堂関白記』での経験も生かしながら、将来的には『水左記』の註釈を作っていきたいと考え

ている。

また大学院演習では、二〇一四年度は考古学専攻の参加者が多かったこともあり、金石文を題材とした。その中で、石川年足墓誌をとりあげたことがある。石川年足は奈良時代に藤原仲麻呂政権のもとで活躍した人物であるが、彼の墓誌は文政三年（一二二〇）、当時の摂津国嶋上郡真上光徳寺（現大阪府高槻市真上一丁目）の百姓であった田中六右衛門によって発見された。墓誌の発見当時は、狩谷極斎の『古京遺文』が刊行（文政元年）された直後であり、奈良・平安時代の金石文への関心が高まっていた時期だった。そうした時代背景もあり、山田以文をはじめとした学者たちによって年足墓誌発見の経緯は記録され、広く知られるところとなった。その時の記録は、奈良時代の貴族の葬送・埋葬の様子などを知る手掛かりとして貴重である。

演習では年足墓誌の発見経緯についても考察が及んだが、その中で市大の学術情報総合センター（図書館）にも、年足墓誌にかかわる資料が残されていることが分かったことは大きな発見だった。市大は昭和二四年に大阪の実業家であった森繁夫氏のコレクションを購入しており（森文庫）、その中に『石川年足卿墓誌考證』（請求番号・281.02/YAM/MORI）という写本が含まれている。この本には、標題にもなっているa『石川年足卿墓誌考證』（山田以文）のほか、b『御史大夫年足卿金牌之記』（蓬田子 滝詮）、c『石川年足卿銅牌考』（三宅（河本）公輔）が合冊されている。

このうちbには、墓誌が掘り出された時の詳細な記録が残されている。

こうした発掘の際の記録は、山田以文の『石川卿金牌出現之由来』などが残されているが、伝聞情報をもとにしたもので、執筆者自身が発掘に立ち会ったわけではない。bを著した滝詮も発掘現場に立ち会ったわけではないが、彼は発掘当事者である田中六右衛門の親族と思しき多門院忍明の学問の師であることが注目される。忍明は一度発見した墓誌を埋め戻していた六右衛門らをうながして、再度墓誌を掘り出させて京都に持ち帰った人物であり、滝はこの忍明から話を聞いてbを叙述したと考えられる。したがってこの史料の情報源は、年足墓誌発見の当事者に最も近いところにあるといえる。

森文庫所蔵の『石川年足卿墓誌考證』の史料性格はまだ検討の必要があるが、年足墓誌発見の経緯について考える上で重要な史料となる可能性は極めて高い。こうした史料が、まさに市大に所蔵されていることに気づかされたという点で、この時の演習は強く記憶に残っている。

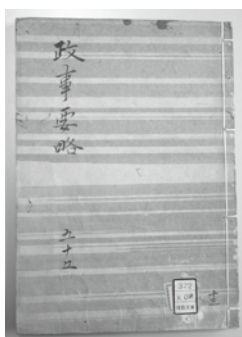
以上が市大に着任してから向き合うことになった研究テーマ、史料についてである。特に三つめに取り上げた石川年足墓誌に関する史料は、市大に所蔵されており、市大で古代史を学ぶ機会を得たからこそ出会うことのできた史料といえる。このほかにも、市民講座などの機会に、大阪の古代史についてお話しさせていただく機会があるが、木崎愛吉『摂河泉金石文』にまとめられているように、大阪は金石文資料に恵まれた地域である。こうした史料を使いながら、市大で大阪の古代史を学ぶことに大切さを痛感している。

むすびにかえて

ここ五年間の筆者の市大での学術的な営みについて概観した。やはり個人的な問題に終始してしまったことは恥じ入るばかりであるが、自身にとってはこれまでの活動を振り返る良い機会となった。

最後に、市大に所蔵されている史料の可能性と重要性を再度強調しておきたい。前述した森文庫『石川年足卿墓誌考證』以外にも、学情には古代史関係の興味深い史料が所蔵されている。例えば福田文庫（経済学者の福田徳三氏の旧蔵本）の『政事要略』の写本（請求番号・322.1/KOR/FUKUDA）は、新訂増補国史大系で底本に採用されている

①表紙（第13冊・巻55）



③第1冊 巻29 追儼



②第1冊 巻22冒頭



大阪市立大学所蔵福田文庫本『政事要略』

し、同文庫の『類聚三代格』の版本（いわゆる印本）のうちの一つ（請求番号：322.135/RUI/FUKUDA）は、小杉楳邨旧蔵本である。これらの史料は、古代史研究そのものにかかわる史料とはいえないかもしれないが、史料の校訂や江戸時代以降の奈良・平安時代史研究の流れを知る上での重要な情報を提供するものであろう。

こうした足元の「資産」と向き合っていくことも、市大で古代史を学ぶ醍醐味であると考えている。

（文学研究科）